

## 奥 克彦について (GGG 28回生)

昭和33年宝塚生まれ。

早稲田大学を卒業後、昭和56年に外務省に入省。英国において研修し、イラン、米国での日本大使館勤務の他、国際経済第一課長、国連政策課長などを歴任した。平成15年4月に、在英国大使館参事官としての肩書きを有したまま、イラクに長期出張。イラクの復興に向け、取り組むこととなった。

氏のイラク復興にかける強い使命感と情熱は、事件の直前まで書き続けていた『イラク便り』に如実に現れている。同年11月29日、イラクのティクリート付近で被弾し、逝去。大使に昇任。

彼はラグビーを深く愛していた。兵庫県立伊丹高校時代には全国大会出場を果たし、早稲田大学でもラグビー部に所属。留学先のオックスフォード大学では、日本人で初めてラグビー部の1軍選手となる。その後も日本ラグビー協会役員となり、日本と世界のラグビー協会の橋渡しにも尽力した。

オックスフォード大学のクラブハウスには彼の写真が「戦死者」として飾られ、オックスフォード関係者から、その45年の生涯をリスペクトされている。

THE KATSU OKU TROPHY  
(イギリスで毎年開催)



## 「ラグビーワールドカップを日本でやろう」

森元総理談 彼が外務省の国連政策課長になると、官邸に毎日来た。W杯招致の分析をして頑張ろうって話し合った。01年に彼は英国でW杯招致の運動をするから赴任させてくれと言ってきた。

外務省に話を通したが、過ちだった。彼は赴任先の英国からイラクへ出張した。

彼のために、W杯(開催権)をなんとしても取らないといけなかった。「W杯を日本でやりましょうよ」と元気に話していたことを思い出します。



## Katuhiko Oku Cup

「スポーツを実践することは、真心と思いやり、なによりも“人間尊重の精神”を養うことであり、そのためには、“フェアプレー”の価値を高めなければならない」

これは、フランスの教育者であり、近代オリンピックの創立者であるピエール・ド・クーベルタン卿の言葉です。彼はフランスで生まれ育ちましたが、英国パブリックスクールの教育に興味を持ちワーテルローの戦いで英国がフランスに勝ったのは、パブリックスクールの心身ともに鍛える教育の効果だと記述を残しています。

また、ラグビー校を訪問した際にラグビーに取りつかれ、自身もプレーを始め、後にラグビーのレフェリーの資格を取って、主にパリの試合で笛を吹いたようです。(Wikipediaより)

私たちはこの精神こそがスポーツマンシップであり、我々が愛するラグビーの精神であると考えます。従いまして、この精神に則り、素晴らしい結果を出した中学生のチームに対し、毎年『Katuhiko Oku Cup』を贈呈するものと致します。



記念樹と記念碑  
(伊丹高校グラウンド)

★Rugger ラガーはSaint Barbarian たれ  
★トライしたら嬉しそうにするな、  
相手に失礼ではないか。  
トライをできたのは後の14人のおかげだ。  
トライをしたらうつむいて帰って来い。  
(県立伊丹高校 初代部長 佐伯先生の言葉より)

